

人が人と出会う

前原 寛



朝のひとコマ

これは、私が理事長を務めている法人が経営する保育園での朝のひとコマです。大学に出勤する前に保育園に行くと、どこからともなく「オハヨー」と声が聞こえてきます。五歳児のHちゃん、三輪車に乗ったまま、まぶしい笑顔を見せて近づいてきます。人懐っこいその姿に、私も「お

はよう、Hちゃん！」とあいさつを交わします。そうかと思うと、一歳児のK君が、トコトコと近づいてきて、ニカッと白い歯を見せてくれます。「おはよう、Kちゃん！」と言うと、とてもうれしそうにそのまま走り去っていきます。そこに、二歳児のIちゃんが、お母さんと登園。「Iちゃん、おはよう！」と声をかけると、ピットとよそを向いてすたすたと歩いて保育者の所に行き、

「オハヨ」とニッコリ笑いかけています。U保育者も「おはようございます」と笑顔のあいさつです。そんな風景があちこちで見られながら、保育園の朝の時間が過ぎていきます。

あいさつは何のために？

なぜ「あいさつ」をするのだろうか、そんな疑問をもったことはないでしょうか。中には、あいさつなどの儀礼は役に立たないという固定観念をもっている人もいたりします。

ところが、あいさつ抜きで人間関係を始めようとすると、実にぎくしゃくします。最近の若者はあいさつができないと言われることがあります。そんなことはありません。型はともかく、若者の人間関係もあいさつから始まっています。いきなり本題に入ろうとしても後が続きません。あいさつ抜きに、人間関係は始められないというの

は、当たり前のことです。

では、なぜあいさつがないと人間関係が始まらないのでしょうか。それは、あいさつが単なる儀礼ではなく、相手との心理的距離を測る行為だからです。

ここでは、あいさつの中でも、特に、朝のあいさつに限定して考えていきたいと思えます。

最初に挙げた三人の子どもの日ちゃんとK君は、日常的に私ととても親しくしてくれます。その日の朝も、そのことを確認してくれているのでしょう。わざわざ私の所に来てくれるのですから。もちろん私も近しいものを感じていますから、親しみのこもったあいさつを交わします。

それに対してIちゃんは、私と距離を置いています。私が保育園にいる時間は短くて、保育者のように日々の生活を共にしているわけではありま

せん。そんな存在に気を許せるものか、という気持ちだが、Iちゃんの姿には表れています。

ところが、Iちゃんが「オハヨ」とあいさつを返してくれる朝もあります。反面、K君の反応が芳しくなくて、私からのあいさつが空振りすることもあります。先のひとコマは、ある朝の姿であり、いつも同じというわけではありません。

相手との心理的距離は、さまざまな条件の重なり具合により、そのときで変化します。それをひと口では説明できません。「朝ご飯をおいしく食べられたから」とか、「まだ眠たいのに起こされたから」とか、子どもにもいろいろあります。私のほうも、心が軽い日もあれば、憂うつな日もあります。そのようにして、微妙に心理的距離は変化します。

私がちよつと考え事していた日に、Hちゃんが「きょうはげんきないね」と声かけしてくれた

こともあります。あいさつする前の姿でわかったのでしょうか。あいさつのにきに励まそうとしてくれました。私もそれに応えるようにあいさつします。

出会う所にあいさつが生まれる

当たり前のことですが、人と人が出会う所にあいさつが生まれます。そこからかわりが始まります。言い換えれば、出会いがないとあいさつは生まれない、ということですが。

人が人と出会う、それは生身の身体が、お互いに触れ合う距離に近づくということです。

私の住んでいるような田舎では、自家用車が日常の重要な移動手段です。車の運転ができないと、日常生活に支障を来します。しかし、車には多くのデメリットがあります。その一つが、あい

(特集)

さつができないということです。

車を運転する人は、車体によってつくられた閉鎖空間の中にいます。そして、車同士は、およそ人間の身体能力では不可能な速度ですれ違いますが、時速40キロですれ違うとき、相対速度は時速80キロにもなります。このような状況であいさつのできる人間はいません。あいさつしようとしても、事故を引き起こすだけです。ですから、朝の通勤時間に、「車同士できちんといさつをしましよう」と言う人はいません。

そう考えると、あいさつは、人が人と出会う場で行われるものであることがわかります。

人のいないあいさつ

あいさつは、これまでのかかわりの蓄積を前提としてなされる場合がほとんどです。朝のあいさは、初対面ではなく顔見知りの相手と交わすほ

うが、圧倒的に多いのが普通です。

それに関連して、思い出される子どもの姿があります。もうだいぶ前のことですが、四歳児で入園してきたYちゃん。とてもお利口さんに育てられてきたのがすぐわかる子でした。Yちゃんは、朝登園してくると保育者の所に来て、直立してきちんと四十五度のお辞儀をして「おはようございます」とあいさつします。とても立派です。しかし、「おはようございます」と私のほうから返しても、笑顔を浮かべるでもなく、表情も変えずにすたすたと歩いていきます。どの保育者とも同じあいさつを繰り返します。

確かにあいさつをしています。Yちゃんにとっては、保育者という存在に対して「おはようございます」という音声とお辞儀という動作をセットにして行うことがすべてであり、相手との距離感を測ったり確かめたりということが見

られません。このような型どおりのあいさつをされると、戸惑いとちよつとした気味悪さを感じてしまいます。

母親から厳しく作法を教え込まれているということがうかがえますが、そのＹちゃんには、あいさつの対象である「人」が存在しないかのようです。

同じクラスの子が、Ｙちゃんに「オハヨ」「アソボー」とあいさつしてかかわってくると、Ｙちゃんはどのようにしていいかわからなくなるみたいいです。返事のしようがなく、そのままやり過ごしていくのを何度か見かけました。

保育園での遊びや生活のリズムが、Ｙちゃんのリズムと少しずつ合ってきたころ、Ｙちゃんはあいさつをしなくなりました。「おはよう」とあいさつしても、私には返事もしてくれません。けれども担任にだけは、ぎこちないながらもあいさつ

を返しています。人との距離の測り方が見えてきたのでしょうか。

さらにしばらくして、Ｙちゃんが保育園になじんできたと思われるころ、「オハヨ」という声が聞こえるようになりました。どうやら私という存在を、保育園の人間として認めてくれたようです。Ｙちゃんのあいさつする姿が、相手によって異なるようになってきています。子どもとのあいさつも多様になり、親しい子どもには自分から寄り「オハヨ、アソボー」と言っています。

多様で多彩なあいさつ

このように見てくると、あいさつは一人ひとり違うという当然のことがわかります。人と人との関係は、みんな違います。その距離感を感じ取り、表現できるようなお互いの身体の在り方があって、そこに音声としての「おはようございま

す」が入り、お辞儀の動作が組み合わされます。

音声と動作を先に教え込もうとすると、Yちゃんのように、人がいないあいさつになるのでしょう。そうではなく、人が人と出会うその場で、瞬間的に距離感を感じ取ることが重要です。その感覚を基盤として、音声や動作が加えられていきます。そのときのモデルが、保育者です。毎朝出会う保育者の姿が、やがて子ども自身の姿に重ねられていくことになります。

あいさつの場を問い直す

朝のあいさつは、出会いの場が重要であること、そして一人ひとり異なること、という当たり前のことを確認してきました。

でも、機会があつてほかの幼稚園や保育所に行くことがあると、今でも、門や園舎の前で、保育者が子どもにあいさつをさせる場をつくり、

チェックしている風景に出会うことがあります。

また、登園してからもうだいたい時間がたつのに、朝のお集まりの中で、「先生おはようございます」「みなさんおはようございます」と大声で言い合っている風景もあります。あいさつって何だろう？ そう問い直してみれば、決して生じないような保育が、今でも珍しくありません。

朝のあいさつだけでなく、帰りのあいさつ、来客へのあいさつ、園外散歩で出会う人とのあいさつなどなど。日常の中には数多くのあいさつがあります。それらは、園生活においてどのような役割を果たしているのでしょうか。そして、保育者はあいさつをどのようにとらえて展開しているのでしょうか。

あいさつ、当たり前前の行為だからこそ、立ち止まって考えることが必要なかもしれません。

(鹿兒島国際大学)